

日本とインドの大学生における英語 WTC モデルの比較

○伊藤健彦 上市秀雄
(法政大学) (筑波大学)

A Comparison of the WTC Model among Japanese and Indian University Students

Takehiko Ito (Hosei University) Hideo Ueichi (University of Tsukuba)

目的

言語コミュニケーションに影響する心理的要因の研究では、Willingness to Communicate (以下 WTC) という要因が重要視されてきた。WTC は、ある特定の状況で言語を用いて自発的にコミュニケーションをする意思 (八島, 2008) と定義されている。近年では、コミュニケーションをする相手を信頼できるかどうかが対人関係の基盤となるという観点から、一般的信頼 (山岸, 1998) が英語 WTC に与える影響が検討されるようになった。一般的信頼は、一般的に他人は裏切らないであろうという期待のことで、他者とのネットワーク形成を動機づける (山岸, 1998)。伊藤 (2024) は、日本語母語話者を対象とした調査によって、一般的信頼が高い人は、英語コミュニケーションを上手に行えると思うと同時に、海外への興味・関心が高まる結果、英語コミュニケーションについて積極的になるというモデルを構築した。

しかしこのモデルは、あくまで英語が外国語であり、普段の生活では英語を使用しない人々を対象とした調査で作成されたため、普段から英語を第二言語として使用する国の人々まで一般化できるかどうか不明であった。そこで本研究は、母語の他に第二言語である英語を公用語として普段から使用しているインドの大学生を対象に調査を行い、日本の大学生とのモデル比較検証を行った。

方法

対象

日本の大学生 東京都にある大学の学生 132 名 (男性 91 名, 女性 41 名; 平均年齢 = 19.33, $SD = 0.95$)。

インドの大学生 北東インドに位置するミゾラム州にある大学の学生 97 名 (男性 40 名, 女性 56 名, その他 1 名; 平均年齢 = 22.60, $SD = 1.59$)。

質問紙

英語 WTC Ito (2024) によって作成された 37 項目の WTC 尺度を用いた (日本 $\alpha = .98$; インド $\alpha = .99$)。例: パーティーで、同席した人に、趣味について英語で質問する。

英語コミュニケーションの自信 Ito (2024) によって作成された 37 項目の英語コミュニケーションの自信尺度を用いた (日本 $\alpha = .98$; インド $\alpha = .99$)。例: 学校で、知り合いに、その場の話題についての意見を英語で言う。

一般的信頼 山岸 (1998) によって作成された 6 項目の一般的信頼尺度を用いた (日本 $\alpha = .79$; インド $\alpha = .79$)。例: ほとんどの人は他人を信頼している。

国際的志向性 Yashima (2002) によって作成された 22 項目の国際的志向性尺度を用いた (日本 $\alpha = .87$; インド $\alpha = .83$)。例: 私は、国際的な問題に強い関心をもっている。

英語話者との接触機会 「普段どの程度、英語話者と接することがありますか」という項目を尋ねた。

結果

英語話者との接触頻度

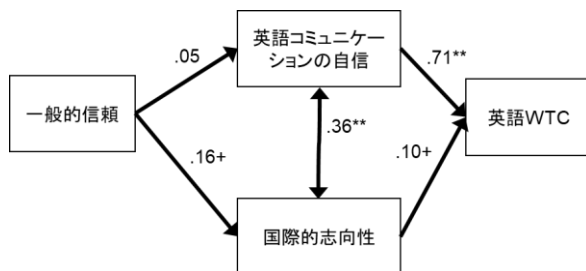
日本の大学生 ($M = 2.17, SD = 1.09$) とインドの大学生 ($M = 3.02, SD = 1.11$) で、英語話者との接触機会に差があるかについて t 検定を行った。その結果、インドの大学生の方が日本の大学生よりも普段から英語話者と接する機会があった ($t(227) = 5.75, p < .01, d = .77$)。

多母集団同時分析

日本の大学生の WTC モデルとインドの大学生の WTC モデルを多母集団同時分析によって検証したところ、適合度は高い値を示していた ($\chi^2(1) = .84, p = .66, GFI = .998, AGFI = .982, CFI = 1.00, RMSEA = .000$)。

まず日本の WTC モデル (図 1) では、一般的信頼から英語コミュニケーションの自信へのパスは有意ではなかった一方 ($\beta = .05, n.s.$)、一般的信頼から国際的志向性へのパスは有意傾向であった ($\beta = .16, p < .10$)。また、英語コミュニケーションの自信から英語 WTC へのパスは有意であり ($\beta = .71, p < .01$)、国際的志向性から英語 WTC へのパスは有意傾向であった ($\beta = .10, p < .10$)。

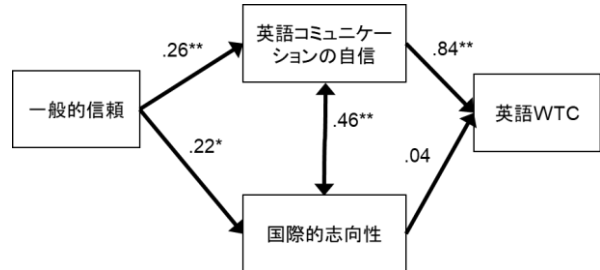
図 1 日本の大学生の WTC モデル



次にインドの WTC モデル (図 2) では、一般的信頼から英語コミュニケーションの自信へのパスは有意であり ($\beta = .26, p < .01$)、一般的信頼から国際的志向性へのパスも有意であった ($\beta = .22, p < .05$)。また、英語コミュニケーションの自信から英語 WTC へのパスは有意である一方 ($\beta = .84, p < .01$)、国際的

志向性から英語 WTC へのパスは有意ではなかった ($\beta = .04, n.s.$)。

図 2 インドの大学生の WTC モデル



考察

まずインドの大学生の方が日本の大学生よりも普段から英語話者と接する機会があったことから、インドは普段から第二言語である英語を使用する環境であることが確認された。

次に多母集団同時分析の結果、日本の大学生では、一般的信頼から英語 WTC への影響について、国際的志向性が媒介する可能性が示された一方で、インドの大学生では、英語コミュニケーションの自信が媒介する可能性が示された。この結果から、第二言語を取り巻く環境によって WTC モデルにおける媒介プロセスが異なる可能性が示された。

英語で話す機会が少ない環境では、英語能力に対する自信の有無が英語 WTC に影響する一方、英語で話す機会が多い環境では、他者に対する一般信頼が低いと英語 WTC が低下する傾向がみられた。このことは英語で話す機会が豊富な人ほど、コミュニケーション相手を選択した上でコミュニケーションを行っている可能性を示唆している。したがって英語で話す機会が多い学習者に対しては、一般信頼を考慮した上で、異文化理解やコミュニケーションの促進方法、さらには交流を阻害する要因について検討する必要がある。

引用文献

Ito, T. (2024). [Unpublished doctoral dissertation]. University of Tsukuba.